『比較民俗研究』18. 2002／11

研究ノート

中国大陸における風水破壊譚の諸類型

斧 原 孝 守※

一. はじめに

中国の伝統的な宗教観念によれば，大地にはさまざまな気脈が流動しており，それがその土地に住む人々や，そこに埋葬された人々の子孫に決定的な影響を及ぼすと考えられていた。いわゆる風水の信仰である。従って宅地や墓地の選定に当たって最も重要視されたのは，優れた気に満ちた土地，つまり良い風水地を選ぶことであった。風水はまた特定の地点に塔を建てたり，橋を架け，また池を造るなど人工的な造作を施すことによって，よりよく調整することも可能であった[1]。風水塔などがそれである。このような考えは，あたかも人体に経絡という気血の経路を想定し，特定の経穴に刺激を与えることによって身体を調整するという，中国の伝統医学の考えにも通底する。いずれも中国人の自然認識のありように関係するものであろう。ただ経穴の特定と刺激が鍼灸師などの専門家によって行われるごとく，大地の気脈の選定や調整も，それなりの知識を持った者，すなわち風水師，陰陽先生などと呼ばれる特殊な技能者のみが取り扱えるものであった。

中国の民間には，これら風水を操作しうるとみなされていた風水師にまつわる様々な物語が伝承されている。そのなかで，ひときわ発達を遂げた伝承が，ここにとりあげる風水師による風水の破壊を主題にした一群の物語である。ヴォルフラム・エーバーハルトは，つとに『中国昔話の類型』のなかで「風水が破壊される」（タイプ174）という類型を設定し，14の文献を指示している[2]。

このような風水の破壊という主題によって統括された物語群は，さまざまな物語の外枠を借り，また幾多の趣向を包含しながら複雑な成長を遂げている。現実の風水の調整には，それぞれの地勢地形に応じた様々な処置があったが，物語の世界においてもそれは同じである。個々の土地の状況に応じた風水破壊の趣向が，この伝説の興味の中心であった。いわばこのような現実の世界における風水の選定や調整の裏返しが，説話という虚構の世界における風水の看破や破壊だったのである。

風水の破壊そのものについては，古くから記録がある。早く『史記』蒙恬列伝には，秦の始皇帝に仕えた蒙恬が無実の罪で殺される間際，長城建築によって各地の地脈を破壊したせいだと語ったとあり[3]，地脈の切断が人間に影響を及ぼすという観念がすでにこの時代にあったことが窺える。ここから，始皇帝が王気のある地を破壊させたとする伝説が後に生まれている。すなわち『呉書』張紘伝の注に引く『江表伝』には，古老の言として，始皇帝が東巡して会稽に到ったおり，望気者が金陵の地形には王者都邑の気があるといったため，始皇は山脈を掘り断ち，名を秣陵と改めたとある[4]。ここではすでに風水破壊譚の首尾は整っている。

また北魏の『水経注』巻三七に『廣州記』を引いていう。城北の尉陀の墓の後に大岡があり，これを馬鞍岡という。秦の時，気を占う者があり，南方に天子の気があるという。始皇帝が民を発してこの岡を穿ち破らしめると地中より出血した。今も穿った場所があると[5]。さらに清，施鴻保の撰にかかる『閩雑記』が『閩中紀』を引いていう所によれば，福州城の南に金鶏山があり，始皇帝の時代，望気者がこの山には金鶏の祥が

※奈良県立畝傍高等学校教諭

あると言ったので，始皇帝は工人に命じて山脈を絶ち，これを圧伏せしめたという[6]。歴史的には，秦の始皇帝が各地の王気を潜ませた風水を破壊したという伝えがそれなりに展開していたものであろう。

現在，民間で語り広められている物語についていえば，風水の破壊者も多岐にわたり，また風水地の見立てや看破，破壊の方法等々をめぐっても様々な趣向が凝らされ，物語の構想も複雑に成長している。ただ，そこにもいくつかのまとまった物語の流れがあった。ここでは風水の破壊という主題のもとに成り立っているいくつかの物語をとりあげ，この特異な伝承の展開について考えてみることにしよう。

二.「見立て」による風水封殺譚

風水を破壊する物語のなかで最も一般的に知られるものに，ある動物などに見立てた風水をそれに対抗する措置を行うことにより，風水地の活動を封じてしまうという物語がある。いわば見立てによる風水の封殺である。この物語の基本的な形式は以下のように整理できる。

類型Ⅰ．風水の封殺

1．ある動物に見立てられた風水宝地がある。
2．風水を見抜いた人物が，その動物に対抗すべく見立てた物を置く。または対抗する処置を行う。
3．風水は封じられる。

このような物語は中国大陸の全土にわたって知られているが，特に江南地方に発達している。浙江省海塩には次のような物語がある。むかし劉伯温が澉浦城外にやって来て，鳳凰山の風水の良いことに感心する。それを聞いた土地の金持ちが，どのあたりが良いかと問う。劉は南の山腹が良いと答える。劉からうまく宝地の場所を聞き出した金持ちは，これで子孫も繁栄すると喜ぶ。劉は「まだ橋がふたつ足りない。山前に大小ふたつの橋を造り，猫児橋と名付けよ。そうすれば子孫は永く繁栄するだろう」という。金持ちは喜んで橋を造るがそれより幸運に恵まれず，子供は賭博を好み財産も蕩尽する。ある日，金持ちが橋の上から金鳳凰はいつ出るのかと嘆くと，老農民が二匹の猫がいては鳳凰も飛びたてまいという。金持ちは忽然と悟り，川に落ちて死んだ[7]。

劉伯温は明の洪武帝に仕え，風水術をよくしたと伝えられる。江南地方には，劉が風水を破壊して回ったとする，一連の「劉伯温ばなし」が広く伝えられており，これもその一つである。ここでは風水破壊の動機は余り明らかではないが，風水をさらに修正してもらえると思った金持ちを騙す話になっている。興味の眼目は，猫に見立てた橋によって鳳凰を牽制するところにある。

猫に見立てた物によって風水を牽制する趣向は，江蘇省の南京にもある。明の名将，兪通海とその二人の弟は大功があり，通海の死後，朱元璋は通海を虢国公に封じ，弟二人も大官に任じた。ところがある日，風水を看ることのできる者が兪兄弟の家に王気があると報じる。朱元璋は兪兄弟を殺してしまおうと思ったが，宰相の劉伯温に相談する。劉は兪家の周辺に八卦陣をしき，多数の石猫を大門に対して置くように言う。兪と魚とは同音で，二匹の魚を猫によって押さえ，王気を破るためである。朱元璋は劉の計画どおりに兪家の大門前に牌坊を建て，その周囲に百匹の石猫を彫らせた。後の百猫坊である。さらに兪家の後には堵門橋を，東には釣魚台を造り，西の路地を趕魚巷と名付けた。また，秦淮河には二つの橋を架け，それぞれ上浮橋，下浮橋と名付けた。これは兪兄弟たる二匹の魚が，門から出れば百石猫が驚かせ，後では遮り，東では釣り，西では追う。川の上下には浮きがあって魚を釣り上げようとし，魚は最後には枯井戸に落ちて死ぬということなのであった[8]。

この話は，功臣を魚に見立てることにより，兪家周辺の風水を破壊する話になっている。ごく狭い範囲の話であり，また魚を牽制する造作も多岐にわたっているが，基本的には先の海塩の

伝承と変わりない。これらはいずれも鳳凰や魚に見立てた風水に，対抗物として見立てられた物を加えることにより，風水宝地を無力化してしまう話である。

江蘇省の無錫にも「見立て」が発達した話がある。朱元璋が無錫の惠山から太湖馬山と九龍山を見て帝王の気があると思い，劉伯温に対策を講じさせる。劉は口から出まかせに，九つの石竜を置けば，活竜を死竜に変えることができ，帝王の気は破れるという。帝はその通りにし，さらにいくつかの洞窟を穿たせる。これが九竜十三泉である。帝は帝気は破ったが，文臣武将の気は破っていないことに気がついて劉に相談する。劉は文武百官の土人形を作らせ，このため惠山泥人が生まれることになった[9]。石竜や文武百官の土人形を置くことによって，活竜と実際の文武百官の気を凍結させたわけである。この伝説では劉は口から出まかせを言ったにすぎないとしているが，本来的には劉の風水を操作する異能を説いたものであろう。

浙江省湖州の東明村にある錦峰塔は，明の皇帝が建てたものであるという。ある日ここを通った皇帝が，山が獅子形であるのを知り偉人が出ることを恐れる。そこで皇帝は獅子形の首にあたる部分に井戸を掘り，獅子山の稜線に塔を築かせた。井戸を掘ることによって獅子骨を切断し，塔を建てることで釘を打って獅子の動きを封じようとしたのだという[10]。

同じく浙江省紹興市の中心から東北にはずれた所にあるという三埭街は，いわゆる「堕民」と呼ばれる被差別民の居住区として知られた場所である。この地区は昔，周りを川と橋に囲まれており，皇宮の池を意味する蓮と，甲冑の連想から謀反を意味する蟹に見立てた地形から，帝王の気を潜ませた土地だとされていた。明の奸臣たちはこれを増強するために造営を施したが，これを見抜いた劉伯温は巷内にいくつも井戸を掘らせて蓮の葉を穴だらけにし，廟宇をすべて朱色に塗り替えて蟹を茹でたようにしてしまった。このため結局住民は舞台の上で天子や宰相に扮することしかできなくなったという[11]。この話はもっぱら堕民に担われたという「紹劇」の由来譚にもなっている。廟宇を朱色に塗って蟹を茹でるというのは，奇想というべきであろう。

見立ての趣向には，これらの他にもさまざまなものがある。浙江省寧波市には狗形山という犬の形をした山があり，竈の粉ひき小屋は餌入れのようである。土地改革の時，山の木を切り粉ひき小屋もつぶしたので，犬は死んでしまい風水も壊れたという[12]。これは餌箱たる小屋を，それとは知らずにつぶしたので風水が壊れたということなのだろうが，犬に対する餌箱という見立てが面白い。

同じ寧波市には報恩寺という寺があり，雌鶏の形をしている。王家橋という集落はひよこの形をしており，ひよこがみな報恩寺に行ってしまうので子孫が出来なかった。しかし土地改革の時，寺を壊して牧場にしてから子が生まれるようになり村は栄えたという[13]。この話は寺をつぶしたことで風水が良好になったことを説いているが，裏返せば雌鶏形の寺を建てることによって村の風水を壊した話である。いずれにしても共産党による土地改革が，一方ではこのような伝統的な伝承を再生させていたのである。

このように，様々な動物に見立てられた風水宝地を対抗物によって封じる例は華南にもある。福建省泉州には，風水の活穴にあった石獅子が命を得て美少年に変じ女のもとに通うようになったので，石獅子の前の道を長刀の形に石を敷いて獅子を封じたという話がある[14]。また広東省曲江県石角郷にある王氏の祖墳は虎形地と呼ばれ，王氏が年に二度祖墳を祭る時には近隣の村の豚は決まって虎にさらわれていたが，ある風水師が虎形地に向かって廟を建てるように言い，そのようにしたところ虎は現れなくなったという[15]。

台湾海峡にある澎湖諸島には白馬のように見える砂州がある。帝位を脅かす人物の出る「白馬穴」だと言われていたが，大陸から来た地理師が符咒を紅い布に包んで穴に埋め，風水を破

壊したという[16]。動物とは無関係だが，澎湖諸島ではこのほかにも龍門村の近くの海に皇帝が筆や簽呈を置く「筆架」や「簽筒」に見立てられた島があり，やがてそこから天子が出ると言われていた。これを知った皇帝が地図の上で件の島のところに「こんなところからどうして天子が出ようか」と記したため，山勢が沈下し天子が出なくなってしまったと伝える。ただこの村からは多くの役者を出し，龍門の人は芝居の上で天子になるのだという[17]。これは紹興の堕民が舞台の上でのみ天子になることができるという伝承と同じである。このような説き方にも一定の広がりがあったものだろう。

一方華北では，風水地を破壊する者を南方から来た「南蛮子」であるとする例が多い。河北省欒城県五里舗村では，村の北に井戸があって鳳凰の両目に見立てられていた。南方人が県の役人になった時，北方から偉人が出るのを恐れて井戸の上に竜王廟を建てたため，風水が壊れて皇后は出ても皇帝は出なくなったという[18]。また同県獲鹿県にある鳳凰山は，三年に一度鳳凰がやって来て卵を生む。そうすると付近の村から偉人が出るとされていたが，南方人が鳳凰の翼を釘で打って殺したため偉人が出なくなったという[19]。

このように，風水宝地の力の顕現をそれに対抗した「見立て」によって封じるといった物語が，さまざまな趣向を凝らして生み出されていたのである。それは名勝の自然をなにものかに見立てて鑑賞せずにはおれない，中国的な自然景観認識と無関係ではあるまい[20]。ただ，風水宝地が何らかの動物に見立てられたかたちで生命力を保っていたのは，動物や竜がそのまま山に化したという伝説や，大地を支える動物という神話的な伝承などとのつながりも考えてみるべきであろう。

最後に動物とは関係ないが，見立ての趣向がさらに膨らんだ華南の例を二つ紹介しておきたい。ひとつは福建省泉州に伝わる伝説である。明の洪武帝は子孫に皇位を継がせるため，民間の良い風水を恐れ，博識で地理に通じた江夏侯周徳興を召し，各地の「天子地」を破壊させていた。やがて泉州の風水宝地を破壊した周が首尾を洪武帝に報告しに行くと，帝はお前にとって最も悪い風水はどこかと問う。周が泉州東門外七里庵の傍らにある「剪刀芙蓉穴」だと答えたところ，帝はそこをお前の墓にせよと命じる。周は棺を立てて葬られることを願う。こうすればその地は「嬰児吸乳穴」と化し，子孫が続くのであった。だが周の死後，ある和尚が周の墓前に碑を立てて風水を破ったため，首かせをはめられた嬰児は窒息してしまった[21]。ここでも時代を洪武帝の時とするが，劉伯温と違って周徳興は帝の策略によって最低の風水地に葬られることになっている。この物語は，そこから周による風水の再調整への努力と，それがさらに和尚によって破られるという起伏に満ちた構成になっている。このような風水の知識が相対抗する物語も，風水破壊譚の成長のひとつの方向であった。

いまひとつは広東の伝承である。翁源の獅子嶺には宝地があって獅形地という。翁城の呉という者が風水師に教えられてそこに墓を作る。風水師は呉に何と出会っても傷つけないように念を押す。墓に猿が来て鳴くので，呉はこれを不吉として銃で撃つ。風水師は嘆いて，「見猴必敗」といって去る。やがて呉家は富み都で官に就くが，呉は老いたため故郷に帰って暮らすうち，些細なことから侯という知事の恨みをかう。やがて侯知事は風水術を学び，姿を変えて呉家の風水を看る。彼は呉に獅子が逃げないようにしなければならないと言い，石で獅子の首に鎖を作るように言う。呉は石工に石を運ばせるが，石は一夜にして消滅する。侯知事が夜に様子を窺っていると，鬼が犬の血を使われれば大変だと話しているのが聞こえる。知事は犬の血を用いて石を置き，獅子を繋ぐ。さらに獅子の爪の上に銅釘を打たせて獅子の動きを封じる。このため呉家は衰亡し，「見侯必敗」という風水師の言った通りになった[22]。この話には，さまざま

な趣向が組合わさっている。まず風水師の言うことを聞かなかったため，予言どおり風水が破壊されるという運命譚が外枠としてある。その内側に風水師が獅子に見立てられた風水地を鎖で繋ぐように騙す話があるが，そこに風水地は容易には破壊されず立ち聞きによってその秘密を知る趣向が加わっている。

このように風水の破壊を主題としながらも，見立てによって見立てに対抗するという，いわば「見立ての妙」を興味の核とする物語が，さまざまな形をとって結晶していたのである。

三．竜脈の切断

風水説では山脈のことを竜脈と称する。これも見立てのひとつだが，伝説の世界では竜脈，竜穴といえば，特に大地の気脈が盛んに流れている特定の地形，あるいは実際に竜が潜んでいるとされている土地を指している。風水を破壊する物語の中には，この竜脈を掘削切断することによって風水を破壊しようとする例が数多く見える。このような伝説の基本的形式は，単純である。

類型Ⅱ．竜脈切断（A）

1．風水師が竜脈（竜穴）を見破る。
2．彼は竜脈を掘削する。または他人に掘らせる。
3．竜脈は破れる。

江蘇省には，やはり劉伯温に結びついた話がある。江陰閘花山の麓に活竜地がある。劉は地主にこの地に四つの井戸と一つの廟を造らせる。四つの井戸は二匹の竜の目に穿たれ竜は死ぬ。井戸の両側にある水槽は，竜の目から出た血が溜まったものだという[23]。

風水の源泉として地下に竜の存在を見る伝承は華北にもある。河北省静海県の大運河地帯の伝承である。大運河の南岸に長い丘があり，その下には土竜が住んでいる。竜は大運河の方へ頭を向けているといわれている。土地の風水先生は，もしこの土竜が運河の水を飲むようになると，この土地から皇帝が生まれたり，大官が出たりするという。しかしある時，南蛮子が丘の上に胡仙廟を建てたため，土竜は動けなくなってしまったという[24]。似た話は同省欒城県南留村にもある。村の東に南から北に土竜のような地形が延びている。天地の精気と日光の光を受けて生長し，これが冶河まで伸びて河の水を飲むようになれば皇帝が出現すると言われていた。しかし南方人がこれを看破し，土竜が生長すると村中皆殺しになると言って土竜の頭の所に横に溝を掘ったために，土竜は死んで風水は破壊されたという[25]。類話はさらに同省宛平県大瑞園にもある[26]。これら華北の伝説は，後に述べる南蛮子盗宝説話として流布しているものであるが，やはり竜脈切断の物語になっている。ここには地下の竜脈が不断に生長を続け，それが河に到れば風水地が活性化するという，ひとつの竜脈観が窺える。

以上の事例はいずれも単純な方法で活竜地の破壊に成功しているが，地下の竜を殺すためには，さらに複雑な方法が必要な場合があった。

江蘇省塩城には次のような伝説がある。塩城には清代，呉と楊という家があった。共に都で大官となり親しく付き合っていたが，呉一族が罪を得て皆殺しになった時，楊家は救いを求めた呉家の子供を累が及ぶのを恐れて官府に送ろうとした。密かに逃れることを得た呉家の子供は，やがて陰陽術を身につけた知県として塩城に赴任する。彼が城楼に上ってみると，楊家の墓地は金光を発する土竜のようである。ここから天子が出ると知った知県は七十二の大鍬と蓑，マントを用意させると，兵に命じて墓地の周辺に大鍬を刺させてその上に蓑を掛け，さらにマントを掛けさせる。遠望するとあたかも七十二人の兵が墓地を包囲しているようである。知県は城楼に上って呪文を唱える。夕方には墓地の周囲の川の水は赤くなり，血のようになる。真竜天子は殺されたのである。知県は後に死竜が復活するのを恐れ，墓地に千仏庵を建て，壁に

は千仏像を描いて竜を鎮めたが，庵は日中戦争中に消失したという[27]。単なる帝穴の破壊譚というだけではなく，外枠に呉家の楊家に対する復讐譚を借り，楊家の竜穴を破壊する必然性を説くなど複雑になっているが，骨子は陰陽術に長けた知県が風水宝地をなす竜を殺して天子が出るのを防衛した物語である。

欽の上に蓑を掛けて風水を破壊するとは奇抜な想定だが，これには類話がある。同じく江蘇省雲台の伝承である。虎窩の山中に一人の南方先生が来，この地が竜穴の真上にあることを知る。彼は方術によって竜穴を破壊するために朝廷に雇われた者であった。早速彼は人を雇い砂地に溝を掘らせたが，穴はすぐに元どおりになってしまう。そこにもう一人の南方先生が来る。かれは人夫にスコップ，マント，蓑をそれぞれ七つ残させ，竜穴にスコップを挿し，そのうえに蓑を掛け，さらにマントを掛けた。頭にスコップを挿された竜は死に，血は溝に満ち，あたりの土地は真っ赤になったという[28]。竜穴を破壊する方法として，このような説き方が地域的に流行していたものであろう。ただここでは最初の南方先生は竜穴の位置を看破したものの破壊には失敗し，他の南方先生が破壊に成功することになっている。これだけでは風水師の力の差をいうだけだが，ほんらい竜穴，竜脈は特殊な方法によってのみ破壊されるものであった。したがって，竜脈破壊譚は，竜脈の特定と破壊だけをいうだけではなく破壊の失敗を説き，通常では破壊できない竜脈をいかに破壊できたかという点に興味が移動しているものが多い。

浙江省鎮海には帝穴があり，それを竜と虎が守っている。明の洪武帝の命によって各地の帝穴を破壊している目広僧がこれを知る。彼は早速多くの石工に命じて竜心虎胆を掘り出させようとしたが，千年の修行を経た竜虎は容易に心胆を掘り当てさせない。目広僧が山鷹に姿を変えて山の松の木にとまっていると，竜虎の会話が聞こえる。竜虎は互いに自分の心胆のありかを言い，和尚には分かるまいと笑う。翌日，目広僧は竜虎の話の通りの場所を掘り，竜心虎胆を掘り当てる。そこからは血と胆汁があふれ出し，土地は赤く染まった[29]。ここでは竜と虎が風水の源泉そのものにはならず，帝穴を守る存在になっている。主題は風水の破壊にあるが，そこに神怪の弱点を互いの会話を盗み聞いて知るという趣向が取り込まれ，単なる風水破壊譚を越えた神怪退治譚の形にまとめられている。このような伝承は，以下のようにまとめられるであろう。

類型Ⅱ．竜脈切断（B）

1．風水師が竜脈を見破る。
2．彼は竜脈を掘削するが，竜脈は元に戻る。
3．ある人が竜（または神怪）の話を盗み聞いて知った方法で掘る。
4．竜脈は破壊される。

このような物語は西南中国でまとまった発達を遂げている。四川省合江県自裕郷正平村に趙覇王という男がいる。自らの力に驕り悪辣な行為が多い。ある人が県の長官に訴えるが，役人も手出しができない。そこで長官は趙氏の族長に命じ，一月以内に覇王を殺さないと族滅するという。族長は覇王を招いて酒を飲ませ，首を切る。覇王は首を持って家に帰り魔法の神水を付けようとするが，それも捨てられており遂に死ぬ。翌日，竹林の竹が一斉に爆発し，各節から武器を持った羅漢が出る。覇王の祖墳を掘ると中には何もなく，ただ三，四尺の葛の根がある。それを切ると血が出るが，根は元に戻り切断することができない。ある人が夜に様子を窺うと，墓中から声がし，ただ魯班が行ったり来たりするのが怖いだけだという。そこで大きな鋸で挽いてみると根は切れ，三日三晩血が出た[30]。前半は超人的な男を騙して殺す話であるが，後半は覇王の力の源泉であった祖墳の巨大な葛根を切断する話になっている。

立ち聞きの趣向は欠けているが，有力者の威勢の源泉を地中の根のごときものであると見，

これを切断する話は四川省成都市近くの双流県にも伝わっていた。王青雲という男が百姓を糾合して兵を挙げようとする。官兵が王を捕らえるにあたり，王家の墳墓の二，三里向こうの山脈を掘り断ったところ，地中から碗ぐらいの太さの根が現れた。これは山竜というもので，これを切ると山が動き，墳墓に生えていた斑竹が破裂し，千軍万馬が竹林中を駆け抜ける音がした。これより王の行方は解らなくなった[31]。ここでも竹の爆発がある。竹中に眠っていた将来の王気が，風水の破壊と共に消滅したということであろう。地中の根を山竜というからには，これも竜脈であった。

四川には次のような話も伝わっている。清の時代，成都近くの大邑県悦来郷に李という酷薄な地主がいた。父の死後，李が陰陽先生に父の葬地を選定してもらったところ，先生は青竜山のある地点を探し当て，ここに葬れば李一族から皇帝が出るだろうという。これを知った百姓は李家から皇帝が出ることを憂い，竜脈を掘り断とうとした。二晩目に赤い水が流れ，皆はこれを竜血だとして喜んだが，やがて水は止まり掘った所も塞がった。人々は今度は近在の何千人という百姓を集め，一晩で一気に麓まで掘り下げたところ，血水は三年の間止まらず，掘り下げた跡も回復しなかった。やがて李家は全焼した[32]。竜脈は生きている竜のごとく，傷つけば血を流し，また軽い傷は回復することもあったのである。ここでは竜脈の再切断を人間の力を集めることで成し遂げているが，本来的には竜脈の掘削には特殊な方法が必要であった。

雲南省双柏県法朕の小蛇皮という所には，むかし羅という悪辣な金持ちが住んでおり人々を苦しめていた。ある時，村人の一人が夢で仙人からのお告げを聞く。村の後の地板藤を切れば羅家は没落するであろうと。そこで村人は地板藤を切ろうとするが，それは翌日には復元し切断できない。ある若者が夜に様子を窺うと，鶏糞を使う他は切れまいという声がする。翌日若者は鶏糞を集め，切る度に鶏糞を塗っていくともはや地板藤は復元せず切断される。切れた後から一枚の蛇の皮が現れる。それから羅家は没落し，この地を小蛇皮というようになった[33]。ここでも羅家の威勢の源泉が地板藤だったわけである。地板藤とはいかなる物かよくわからないが，蔓性の植物であろう。切った跡に蛇の皮が現れるというのも，この植物が実は蛇体であったということを示している。あるいは竜であったのかもしれない。

竜脈の切断にさらに趣向をこらした物語が，雲南省宣威県に伝わっている。ある時，貧しい豚飼いが子供を連れて貴州から宣威まで来るが，老竜嶺の上で病になって死ぬ。何万という蟻が遺体に土を運んで塚を作る。やがて豚飼いの息子は逞しく成長し，ある日，茅で作った矢を射るとそれは都にまで届く。皇帝は驚いて道士に調査させる。道士は矢を射た青年の父の塚が風水地にあることを知り，地方官府に命じて塚を壊させる。塚は翌日にはもとに戻っている。夜になって道士が塚の様子を窺うと，竜脈を断つには鉄釘を十字に打つのみだ，と話し声がする。そこで道士は童男童女を塚の前で殺して十字に置き，塚を壊させたところ，塚は元に戻らなかった。その後青年は病気になったが，治った後では弓を引くこともできなくなった[34]。この伝承ではたまたま竜脈の上で行きだおれた貧民の息子が王気を得ることになっており，後は江南の伝説のごとく帝位を守る道士による竜脈の破壊譚になっている。雲南ではこのような伝承は，少数民族のあいだにも及んでいる。

清の光緒年間，景谷県のタイ族の人々は，刀土司の悪政に苦しめられていた。ある漢族が水を引いて池を造り田を灌漑するように建言したので，土司は早速工事にかかる。だが人々が溝を掘っても，溝は夜のうちに元通りになってしまう。ある人が夜に見張っていると，数人の白い髭の老人がやって来て，銅釘，鉄釘を竜腰に打たれることだけが心配だ，といって去る。翌日，銅と鉄で釘を鋳て打つと土はもとには戻らない。さらに溝で童男童女を草に包んで油をか

けて焼いたところ，竜脈は掘り絶たれ，以後土司は衰えたという[35]。この伝説の骨子は，漢族が風水の知識のないタイ族の土司を騙して竜脈を破壊させた話である。竜脈を断つにあたって童男童女を犠牲にするというのは，宣威県の類話と同じ説きかたである。竜脈を破壊する趣向にも，地域によってそれぞれの説きかたが伝えられていたらしい。このように，西南中国には，土地の有力者の威勢の源泉たる竜脈を破壊する物語が，さまざまな趣向を組み合わせながら広く流布していたのである。

四．陥没説話

陥没説話とは，ふつう神ないしは仙人が村を訪れて冷たい扱いを受けたため，村を陥没させてしまうと説く，いわゆる外来者歓待型伝説の一型である。風水説話における陥没型は，明らかに伝統的な陥没伝説からの変化であるが，陥没の原理を風水によって説明しているところに特徴がある。

類型 Ⅲ．陥没説話
1．風水師がある土地で迫害される。
2．風水師は土地の風水を破壊する。
3．その土地は陥没する。

江蘇省の伝説は次のようにいう。むかし猴嘴山の北の海の側に荒地があり，石花県といった。ある年，一人の南方先生が県城にやって来，土地の者に水を求めた。土地の者は水を与えなかったばかりか，彼を罵った。やがて南方先生は，やはり土地の者に苛められた石工に出会う。南方先生は石工に，猴嘴山上の石猿が北に向けている指を折れば，仕返しすることができるという。石工がその指を折ると，石花県は陥没して海になった。もともと石花県は石猿の指に支えられていたのである。やがて海水が引き，石花県は荒地となった[36]。構想は典型的な外来者歓待型の陥没説話であるが，ここでは石猿が支える町の風水を風水師が破壊したことになっているのである。江蘇省には竜が土地を支えていると説く話もある。

あるところに化け物屋敷がある。一人の乞食がそこに泊まると，夜半怪物が現れ，自分は長年お前の蔵の番をしていたといって鍵をくれる。乞食が鍵で部屋を開けると宝があり，乞食は一夜にして金持ちになる。やがて一人の南方先生が来，件の屋敷が竜穴の上に建っていることを知る。先生，乞食の屋敷を訪ねていうに，この家は竜尾の上に建っている。従って竜頭が動けば必ず陥没する。もし竜頭にスコップを刺し，そこに蓑を掛け，さらにマントを掛ければ竜頭は動かなくなるだろうと。乞食が早速言われたようにしたところ，竜が突然動き始め尾を一振りしたため，乞食の屋敷は陥没してしまった[37]。

前半は「化け物屋敷」の昔話である。後半は風水師が金持ちを騙して没落させる話だが，本来的には驕りたかぶった男が風水師を歓待しなかったという一条があったかと思われる。ここで説かれている竜頭の動きを封じる法は，江蘇省の塩城や雲台などで知られている竜を殺す方法と同じだが，面白いのは風水地の破壊というより，地下の竜を刺激したため，その上にあった乞食の屋敷が物理的に陥没したという説きかたである。ここには風水説話のかたちを取りながらも，大地を支える動物を刺激したために地震が起こるという，地震神話の伝承が露呈しているように思える。

風水説話ではないがこんな話もある。山東省南部の東郭城の門外にある賀家池という河には，むかしひとつの村があった。ある農民が脱穀していると，地面から突き出た筍のようなものがある。それを掘り出そうとしたところ，突然水に覆われ，村は水底に沈んだ。筍は竜角で，それを掘ろうとしたため竜が怒ったのだった。晴れた日には水底に家の棟が今も見えるという[38]。これも一種の陥没説話であろう。いずれにしても，大地の竜が動いたために土地が陥没したという神話的な伝承が，風水信仰に支えられた竜脈の観念と習合して，このような伝承を生み出

していたのである。

典型的な陥没型の風水説話は，中国大陸を離れて，むしろ朝鮮に伝わっていた。京畿道開豊郡の黄江にまつわる話である。高麗の時代，物乞いの僧がある長者の家にやって来る。長者は牛の糞を与える。これを聞いた大師がその長者の家に物乞いに行くと，長者はやはり牛の糞を与えようとする。大師は屋敷の裏山の竜の背中のような部分を切ればもっと豊かになると言って去る。これを信じた長者がそこを掘らせたところ，血の水が出たかとおもうと屋敷は水に埋もれ，あたり一帯は河になった。それが黄江だという[39]。屋敷の裏山のある部分が竜脈で，そこを切ったために風水が破壊され，洪水が起こったわけである。朝鮮では陥没伝説はよく知られた伝説であり，風水説も広くいきわたっている。中国と同じく在来の陥没伝説が風水説によってこのようなかたちにまとめられていたのである。

五．南蛮子説話

華北一帯で最も人口に膾炙した伝説のひとつに「南蛮子説話」がある。南蛮子とは北方人が南方人を指していうことばで，「普通の者にはごくつまらない物にしか見えないものを，稀代の宝物と見抜くふしぎな能力をそなえていると考えられていた」という[40]。「南蛮子」に，江西など南方から来た風水師の印象が投影されていることは間違いあるまい。じじつ，華北の村落などでは，売薬医療を生業とする「売薬的」や，筆や書物を商う「売筆的」などと共に風水先生を南蛮子と呼んでいたという[41]。南蛮子を主人公にする風水の破壊譚は，先にも述べたようにさまざまなかたちで展開しているが，なかでも発達をとげているものに，南蛮子が土地の風水の源泉たる鎮物を看破し，それを奪おうとする伝説がある。この伝説は，結末が南蛮子の行為が失敗したと語るものと，成功したと説く二つのタイプがある。

類型Ⅳ．南蛮子盗宝

1．南蛮子（南方人）が土地の風水の源泉たる鎮物の所在を看破する。
2．南蛮子は特殊な方法を用いて宝物を奪おうとする。
3．(a) 南蛮子の行為は失敗する。
　(b) または宝物は盗み取られ，土地の風水は破壊される。

華北の南蛮子盗宝譚は，戦前に沢田瑞穂氏や山本斌氏，直江広治氏などによって採録された資料が知られている。その中からいくつかの類話を示してみよう。まず南蛮子の盗宝が失敗したと説く型［3－(a)］である。

河北省涿県の県城の下には雌雄の金の羊が住む。南蛮子は城壁の一角で羊の居場所を探し当て，霊芝草を用いて金の角を引き出すことに成功したが，角が折れたため角だけを持ち去ったという[42]。これは中国に多い金牛伝説の一種である。同省順義県では鶏になっている。ある井戸に金の鶏がいる。南蛮子は井戸の前に大豆を置いて，だんだん豆を遠くに置いて鶏をおびき出すことに成功したが，ある老人がやってきたので捕まえられなかった。老人は魯班とも呂洞賓だともいう[43]。この類話は山西省の大同にもある。ここでは鉄牛になっている。大同の東関外の御河には十二頭の鉄牛が住み，堤防や橋を守っている。南蛮子が鉄牛を一頭ずつおびき出して捕まえたが，ある老人が現れたため最後の一頭を残して去る。御河にはまだ一頭の鉄牛がいて洪水を防いでくれているという[44]。仙人が南蛮子から村を守った話として拡布していたものであろう。

このような物語の末尾が南蛮子による盗宝の成功をいうことになれば，風水の破壊譚［3－(b)］になる。類型Ⅰでみたように，風水地は動物に見立てられることが多かったが，ここではそれが風水の源泉をなす動物の形をとった鎮物になっているわけである。

河北省欒城県寺下村の西に風水地があり，金兎

の精が宿っていた。このためその土地の持ち主は立身出世を遂げていたが，あるとき南蛮子がこっそり兎を盗み出したので，風水はしぼんでしまった[45]。また同省良郷県の県城は鶏鳴城といい，城壁のある場所で足踏みをすると下から鶏の鳴き声が聞こえた。光緒27年（1901）年に南方出身の県長が西門の出口を塞ぎ，卍型の道路を破壊したため風水が崩れ，傑物が出なくなったという。また一説に南蛮子が太陽がまだ出ないうちに城壁の中の鶏を誘い出してしまったのだともいう[46]。

鎮物は必ずしも動物の形態をとっているわけではなかった。欒城県の県城は掘割で囲まれ，東関外の掘に架かる橋の北側の橋胴に宝剣があって，それが橋を守っていた。しかしある時，南蛮子がこれを知って宝剣を盗んで逃げたため，それ以降土地の者で県長や大官になる者は出ず，県城の景気も悪くなったという[47]。また新城県四宝村には，かつて名前のとおり四つの宝があって，それがある限り村は栄えると言われていた。だが南蛮子によって宝は盗まれてしまい，貧しくなってしまった[48]。

この南蛮子盗宝譚とよく似た話に，いわゆる胡人採宝譚がある[49]。

(1) 胡人が何でもない品物を大金で買おうとする。
(2) 品物の持ち主は不審に思い，その品物に手を加える。
(3) 宝物は力を失い，胡人は宝物の意味を説明したあと失望して去る。

この伝説は土地の人間には何の値打ちも無い物が，実は胡人にとっては至宝であり，後に胡人が明かす宝物の真の用途に興味の中心がある。これに対して南蛮子盗宝譚では，宝物の用途には余り関心がなく，南蛮子がいかに土地の風水の源泉をなす鎮物を盗み取るかという点に興味の中心が移動している。もっとも，南蛮子が何でもない瓜や茄子を買い，それで地下の金牛を引き出そうとする話もあるが[50]，これは採宝譚と盗宝譚とが結合した形式であろう。いずれにしても両話の興味の所在は異なるが，どちらもその土地の住人には無用に見える物の真価を外来者が看破し，これを手に入れようと試みる点においては一致しているのである。これを「完全に似て非なるもの」とする考えもあるが[51]，両話を歴史的に全く無関係であるとすることはできない。現在，華北一円に流布している南蛮子盗宝譚は，唐代以来の伝統的な胡人採宝譚を骨子としながら，異人の役割を南方出身の風水師など，すなわち南蛮子に負わせ，風水破壊譚の次元で物語を再構成したものに違いない。

六. 失明した風水師

オランダの中国学者，デ・ホロートは，中国の地相師（風水師）が，「自分たちが二重の力をもっていることを例示する実話や逸話を絶えず拡げることによって，吉凶双方を支配できるという彼らの名声を維持するために随分と気を使っている」例として，次のような物語を紹介している。

むかしある一家があって，有名な地相師に探してもらった墓のおかげで繁栄していた。地相師はその場所への埋葬は自分の視力と引き換えになることを承知していたが，死ぬまでその一家と共に住み，面倒を見て貰うことを条件に墓地の場所を教えたのであった。ある日，その家の子山羊が外便所に落ちて死んだが，誰もその肉を食べようとはせず，盲目の地相師に食べさせた。後にそのことを知った地相師は，間違った指示を与えることによってその家の墓所の良い風水を破壊し，その一家を貧乏にしてしまった。彼の目は再び見えるようになった[52]。

この物語がどの地方で語られていたものかは分からないが，同様の伝えは現在の伝承の中にもいくつか見いだすことができる。この伝承は，以下のようにまとめることができよう。

類型Ⅴ．失明した風水師

1．ある家が風水師に墓地を選定してもらう。但し風水地の選定によって風水師は失明するので，彼らは風水師を養う。
2．その家は繁栄するが，やがて風水師は粗末に扱われる。
3．これを知った風水師は，家の主人に間違った指示を与える。
4．その家の風水は破壊され，風水師の目は見えるようになる。

上海の伝承では，ある男が家を建てたいと思い，風水先生に竜穴地を看てもらう。風水先生は竜穴地を教えれば，失明するといって教えることを拒んだので，男は先生を一生養う約束で教えてもらう。はたして先生は失明し，男は新たに建てた家に先生を養う。ある日，男の妻が先生に鶏肉を食べさせたが，それが肥壺から拾って来たものであることが子供の言葉からわかる。先生は男の妻に，昨夜夢を見たが，家の下の石亀が家に害をなす恐れがあるのでこれを掘り出すようにという。男が早速石亀を掘り出したところ，それによって風水が破れてしまい，家はたちまち焼けてしまう。それと共に，先生の目は治った[53]。

澎湖諸島では，澎湖で唯一の進士，蔡廷蘭（1801－1859）の伝説になっている。蔡進士の父は大陸からある風水師を呼び，七鶴穴という風水地を教えてもらう。そこに墓を作れば七人の大官が出るという。ただ風水師は，この地は山神の管轄する地でここに墓を作れば自分が失明するという。蔡の父は風水師の面倒を一生見ることを誓い，そこに墓を移す。果たして風水師は失明する。最初，蔡家は風水師を厚くもてなしていたが，やがてひどい扱いをするようになる。風水師はある日，墓の下を掘って墓をきれいにせよという。蔡が掘ると七羽の鶴が中から飛び立つ。蔡はこのうち一羽だけを捕らえることができた。このため蔡家からは一人だけ官につくことができたが，それが蔡進士なのだという[54]。

このような伝承は少数民族のあいだにも知られている。貴州省間嶺自治県大橋郷のチュワン・トン語族に属するプイ族の伝承では，次のようにいう。清の咸同年間，何代も一子だけが続く温某という者がいた。ある時，一人の風水先生が温の家に来て言うに，祖墳は後生を毀損しているので子孫が絶える心配があると。温は先生を家に迎えると，祖墳を移して貰いたいという。先生は山の窪みの左側を墓地に選ぶが，温の息子の嫁は風水を信ぜず，墓は山の中央にした方が良いという。先生もまた中央が良いことは解っていたが，そこに墓を造ると先生に害が及ぶのだった。温は先生の面倒を見ることを保証して祖墳を山の中央に移す。これより温家は発展したが，先生は失明した。やがて温家の先生に対する扱いは粗末になり，ついには下人のような仕事までさせるようになった。ある日，通りがかった先生の弟子がこれを知って怒る。彼は温に言うに，かの墓は富を司るが貴は司らず。富貴ともに望むならば，対面する山の竜脈を継がねばならず，そのために間を流れる河に石橋を造って竜脈を通わせよと。風水師は報酬に子馬一頭を要求しただけであったが，その馬を河で洗うと宝馬になり，風水師は馬に先生を乗せると飛ぶように去った。風水師の言うとおりにした温家は衰亡した[55]。ここでは失明した風水師の弟子が復讐することになっているが，構想は上海の伝承とほぼ同じである。子馬を宝馬とするのは，普通人が見抜けない宝を見抜くことで，「胡人採宝譚」と同じ趣向である。プイ族は漢族から多くの風水民俗を受容しており[56]，この伝承も漢族から伝わったものであろう。

以上の諸例からすれば，このような物語は中国南部に多く伝承されているようであるが，類話は華北にもある。故事村として名高い河北省藁城県耿村の伝承である。ある風水師の義兄が，墓地を選定してほしいという。風水師は自分の目がつぶれるというが，義兄は面倒を見るという。風水師は墓地を選定する。やがて義兄の家は繁栄し，風水師の目はつぶれる。義兄は風水

師を丁寧に扱うが，やがて義兄夫婦が死ぬと家族の者は風水師を冷たく扱う。風水師の弟子が先生を助けるためにやって来る。風水師は弟子に，この家の墓に行くと白い髭の老人がいるのでこれを殺し，百歩振り返らずに去れと命じる。弟子が墓に行くと大きな建物があり，庭に老人が座っている。弟子が老人を殺して百歩歩いて振り返ると，建物は倒壊している。その後義兄の家は没落し，風水師の目は見えるようになった[57]。プイ族の例と同様，失明した先生を弟子が助けることになっている。おそらくこのような伝承は，さらに広い地域に伝わっていたに違いない。

風水の破壊譚にはなっておらず，失明の趣向もないが，台湾の広沢尊王の伝説はこの伝承と無関係ではないであろう。広沢尊王は，むかし陳という豪家の牧童であった。陳は先代の墓地を選定するために竜眠の吉地を探そうと，風水先生を家に雇った。陳は先生を冷遇したが，牧童は丁寧に先生の世話をする。先生は羊柵の所が吉地であると看取したが，陳の心を試すために滞留を続ける。ある日，吝嗇な陳が珍しく羊肉の料理を先生に馳走した。先生は喜んで食い，後に牧童にこれを話したところ，牧童はあの羊は便所に落ちて溺死したものであるという。先生は陳の心を知り，優しい牧童に父母の遺骨を粉にして羊柵の所に撒くように教える。牧童は先生に教えられたようにし，また指示された場所にいって趺座し，やがて化神したという[58]。この伝承では，陳への復讐を説かず，牧童が化身に至る方向に話が展開しているが，風水先生を独眼とする異伝もあり[59]，本来的には上海の事例のような形でなかったかと考えられる。

このような一連の物語は，家を繁栄させてくれた者を粗末に扱ったために没落する，という話で，物語の構想としては日本の昔話の「竜宮童子」[60]と共通する。ここでは，風水先生は失明することによって，風水地を教えた家に留まる必然性を獲得しているのだが，この失明の趣向にもそれなりの背景があった。中国の民間には，建築主から不利益を被ることに気づいた大工が建物に何らかの呪物を施し，その効果によって建築主は被害を受けるという伝説が流布している[61]。ただ面白いことに，それらの呪物が取り除かれると，今度はそれが大工に災いをもたらすという。家に害を与える呪的な措置を除去することは，家を富ませる呪的な措置たる風水地の選定と同じことである。つまりはごく小規模な風水の調整である。

ヴェトナムのハノイの西方にある傘円山という霊山の精霊にまつわる物語も，これとは無関係ではあるまい。ある狡猾な青年が河の底に竜が住むことを知る。王となるためには祖先の骨を入れた包みを竜の口に置いてこなければならない。しかし竜を見れば目がつぶれるという。青年は包みを作って河底に潜り，片目を覆って骨を竜の口に入れる。彼は片目を失ったが精霊となったという[62]。この物語はいわゆる「天子地型」という風水説話の一型である。ここではある種の智恵話になり，またこの背後に精霊が片目であるという伝承があったためとも思われるが，ここにも風水を操作した者が失明するという観念が現れている。これらの物語の背後には，ある種の風水の操作がそのまま自分の害にもなるという，風水師のフォークロアがあるのであろう。

七．竜になり損なった風水師

旧満洲国の師道大学教授であった高山信司は，「満洲」に伝わる話として次のような物語を報告している。陰陽先生の息子が父親に墓地を選んでほしいという。先生は自分が死んだら東蒲河の西の岡に埋めるように，ただし屍は裸にして高粱稈に包むだけにせよと命じる。やがて先生が死んだので息子たちが遺言の通りにしようとすると，娘がせめて着物の一枚でも着させてはというので，猿股一枚をはかせて埋葬する。その日より東蒲西岸上空に紅雲が漂い，一頭の白犬がそれに向かって吠え続ける。朝廷の天文官は竜位を狙う妖星が出たことを知るが，その位

置は紅雲に遮られてわからない。一方，陰陽先生の息子たちは白犬を不吉として殺してしまう。すると紅雲は消散し，天文官は妖星の位置を観測した結果，東蒲の西の岡を発掘しはじめる。しかし何も出ないので役人たちは引きあげるが，一人が忘れ物を取りに戻ると「あと五寸も掘られたらおしまいだった」という声がする。そこで再び掘り下げてみると，金色の大竜が潜み腰には猿股が貼り付いている。竜が天に昇るのを猿股が妨げていたのであった。しかし陰陽先生の子孫は代々大官となって繁栄したという[63]。

これとよく似た伝説は，内蒙古自治区の東端，黒竜江省と接する莫力達瓦旗にすむダウール族にも知られている。清の乾隆年間，嫩江の上流の開闊屯に一人の老人が息子と娘と一緒に暮らしていた。ある日，村に占い師が来たので占って貰うと，占い師はあなたは将来大官になるが，百日以内は何もせずひたすら我慢せよという。老人は毎日家にいたが九十九日目に菜園の樹を伐って陣地を作ったところ，頭上に黄竜が現れる。老人は喜ぶが，立ちのぼった彩気が朝廷を直射する。嫩江の上に王気があることを知った欽天監は，直ちに風水を破ることを皇帝に建言する。皇帝は開闊屯の東北の山に穴を掘らせ，皇冠，皇服を埋め，石碑を建てる。台座には亀をもってし，「鎮方円二百里」と記す。さらに三十里離れた鳳凰山に娘娘廟を建てて王妃の出ることをも防ぐ。以来この地方には美人は出るが，王妃は出なくなった[64]。ここまでは王気をはらむ風水を鎮物や廟によって封殺したという話であるが，この伝説にはさらに次のような後段がある。

すなわち風水を破られた件の老人はやがて死ぬが，死に際して息子に自分の遺骸は裸にして棺に納め，豚の飼箱の下に埋めるように遺言する。しかし娘は父の遺骸にズボンを穿かせる。その後，家の犬が夜毎屋根で眠るようになったが，娘はこれを不吉として殺させる。犬の死後，天には星が多く出るようになり，これが朝廷の欽天監によって発見される。星が老人の棺から発するのを知った欽天監が人を派遣して老人の棺を暴いたところ，遺骸は地下水脈に従って東に動き，地下水が嫩江に交わる手前に到っている。死体はほとんど竜形になっていたが，ただズボンが足首に掛かっていた。使いは死体を九段に斬って皇帝に報告した。娘がズボンを穿かせたために下肢の一部が竜になれず，また星の光を遮っていた犬が殺されたために，欽天監に発見されたのであった[65]。

ここでは主人公の老人を風水師だとは言っておらず，また盗み聞きの趣向もないが，娘が遺言に違えて下着をはかせる趣向，王気の発現を防いでくれていた犬を知らずに殺す条など，細部にわたって冒頭に述べた伝承と一致している。東北一帯にこのような伝説が拡布し，それぞれの地域で土地に根ざした伝説として生きていたものであろう。エーバーハルトはこれを独立した類型（タイプ172）としてまとめているが[66]，やはり風水が破壊される物語である。

そもそもこの物語は，風水の破壊という主題によって統括される一連の風水破壊譚の中でも，最も文芸的に成長を遂げているものである。その基本的な形式は，次のようにまとめることができる。

類型 Ⅵ．竜になり損なった風水師

1．ある風水師が息子たちに遺言を残して死ぬ。遺言には自分を裸にして埋め，黒犬を大切にするようにいう。
2．子どもたちは，父の遺言のとおりにしようとするが，風水師に下着だけを穿かせて葬り，犬を殺してしまう。
3．朝廷の欽天監が真天子が現れたことを知り，地点を特定する。
4．役人が風水師の墓を掘ると，風水師の遺骸は竜になりかかっていたが，下着を着けた部分だけが竜になりきれていなかった。黒犬は真天子の位置を隠していたのだった。

山東省濰坊市の類話は次のようである。高名な地理先生がいる。息子たちがどうして自分のために良い風水地を探さないのかと尋ねる。先生は我々には分というものがあると答える。それでも息子たちがしつこくせがむので，先生は自分が死んだら，村の東の井戸に屍を裸にして入れるように遺言する。先生の死後，息子たちは遺言の通りにするが，裸というのは体裁が悪いのでパンツをはかせて葬る。その後，ある地理先生がこの井戸の風水を見破り，村人に井戸の悪竜を掘り出さないと村に害を与えるという。村人が井戸をさらえてみると果たして竜が見つかったが，パンツをはいておりその中は人間の体だった。これを知った息子たちはパンツをはさせたことを後悔する。パンツが無ければ父は竜に化し，地脈に乗じて去ることができたのであった[67]。

ここでは地理先生の風水を破るのは朝廷の欽天監ではなく，他の地理先生になっている。従って風水地を隠す霊物の趣向も後退し，物語としては矮小化してしまっているが，風水師が分を越えた栄達はできないという考えを説いているのは面白い。

同様の物語はさらに南の江蘇省にもある。ある陰陽先生が息子に遺言する。自分の死後，遺骸を門の傍らに運び，船に置け。夜になってから衣服を剥いで波に沈めよ。お前たちは家に帰り暗い部屋に隠れて，黒犬を大切にせよ。そうすれば四十九日後には皇帝になれるだろうと。父の死後，息子たちは遺言の通りにするが，遺骸の左足にズボンをかけたままで波に沈める。家に帰った息子たちは妻に黒犬の世話を言いつけ，自分たちは部屋に隠れる。黒犬が狂暴になったので次男の嫁が打ち殺す。この時，朝廷の欽天監が天に紫微星が出，それが黒雲によって隠されていたのが，雲が晴れたことを知る。早速帝は紫微星が指し示す陰陽先生の家を囲む。この時，暗い部屋の上に竜が現れるが左の腿に鱗がない。兵は，竜と陰陽先生の息子二人を斬り殺した[68]。ここでは遺骸を河に沈めるところが特殊だが，基本形式は東北から山東の類話とほぼ同一である。

同じ江蘇省でも通州にはやや違った話がある。通州（江蘇省南通県）に曹という風水先生がいる。死ぬ前に二人の息子が自分たちにも福を分けて欲しいという。先生はお前たちには福は無いというが，それでも試しにやってみるように言って，次のように指示する。自分の死後，遺骸を縄で縛って東方に行き，縄が切れた所に遺骸を葬れ。位牌を祀る机に立てる枕燈明を便器で覆い，屋根には升を伏せよ。四十九日たってこれを取れば，お前たちは皇帝になれるだろうと。二人は喜んでそうするが，七日たったときに家中の者が病気になる。この頃，異相の子どもが多く生まれ，曹家の裏の竹藪には奇異な竹が多く生える。四十五，六日目に叔父が来て，こんなことをするから病気になるのだといって便器を取る。中から赤い光が上天する。病は癒えたが新生の赤子は死に，新竹も枯れる。節の中には目の見えぬ子どもが詰まっていた。通州一賢いという男も目が見えなくなる。朝廷の欽天監は通州に真竜が現れたことを知り，曹氏の墓中の竜を殺そうとするが，鉄の槍や銅の棒は竜には届かない。ある人が銅鉄は臭気があるので竹で刺せばよいといったのでそうすると，泥中から血が出，兄弟も病死する[69]。

ここでは下着を着ける趣向は欠落しており，最後は単なる竜脈切断の話になっている。王気の発現を隠すものが黒犬の代わりに便器になっているところが面白いが，新しい変化であろう。この話ではむしろ風水が破れてからの変化に詳しくなっている。ひとつ注意すべきは，ここでも風水師が失敗を見通しているところである。風水師に風水宝地を見抜く力がある以上，風水師やその子孫こそ最も立身出世を遂げやすいはずである。こうした当然の疑問にこの物語は一つの答えを出している。風水師の子どもたちが親に自らの栄達を希望するが果たせないという運命譚的な枠組は，おそらくこの物語の本来的な構想であったものであろう。

類話はさらに上海市にもある。金山県の伝承である。むかし漕泾鎮東面に風水先生が住む。先生の息子や嫁は自分の家のために風水地を探してほしいという。先生はある肉屋が風水地に建っていることを知り，わざと肉屋の主人に殴られて死ぬ。息子は父の遺骸を肉屋のまな板の下に埋葬し，自分の家もそこに移築することを要求する。息子は遺言通り父の遺骸を裸で埋葬しようとするが，叔父が許さず下着を穿かせて埋葬する。風水師は一匹の白竜となり，子孫を富ませることができたのだが，下着をつけたためにそこだけが竜身になれず，予期した希望は叶えられなかった[70]。ここではむしろ風水地の選定と取得に興味が移動しており，王気の発現を隠していた物を除いたため，欽天監に発見されるくだりを欠いたために，物語が全体として緩んでしまっている。ただダウール族の類話のごとく，風水地を殊更に汚れた場所に選定しているのは，やはりこのような説きかたに，一定の広がりがあったためであろう。

湖北省にはやや変化した類話が知られている。九宮山の狐師で鄭という男，張道真に職人たちの調理人頭に任ぜられるが，常に食糧を盗み食いしていたので，職人たちに打ち殺されて調理場の水甕の下に埋められる。これを知った張が鄭の死体を掘り出してみると，頭には一対の角が生え，身体は鱗に覆われていた。この地は風水宝地で鄭は竜に変じようとしていたのである。張は鄭が九宮山の霊気を破り，自分が昇仙できなくなることを恐れ，彼を一天門に葬り，巡山大王に封じ，巡爺殿を建てた[71]。この伝説はいままでに挙げた類話の枠をはずれているが，鄭を中心に見ると，やはり風水が破壊されたために竜になり損なった話である。また調理場で殺され，水瓶の下が風水宝地であったというのは上海の類話と一致し，互いに無関係であったとは考えられない。これも変化のひとつであろう。

さらに内陸部に入ると，貴州省黔南布依族苗族自治州独山県にすむ苗族にも類話がある。明代，独山県に王という老人が三人の息子と暮らしていた。老人は亡くなる時，息子たちをよんで遺言していう。自分を葬るに当たっては棺を用いず，裸体を筵で包んで葬り，四十九日後に墓参せよと。兄弟はそのようにして埋葬するが，父の腰には腰ひもが巻かれたままになっている。兄弟が四十八日目に墓参すると，墓に三本の矢があり，兄弟の名が書かれている。兄弟はそれより弓を稽古し上達する。ある日，三男が矢を射ると矢はたちまち見えなくなる。矢は皇帝の側で大監が捧げた金盆に当たる。矢に書かれた名前から三兄弟は探し出され，処刑される。州官は王老人の墓を破壊するが，墓はたちまち元に戻り，また移動するので道士を招いて処置させる。道士が黒犬の血を墓に注ぎ，周囲に鉄釘を打って三日三晩墓を掘ると遂に墓は壊れる。老人の遺骸は上半身は竜になっていたが，腰ひもから下は人間のままであった。兄弟の死後，家の前の竹林は枯れたが，竹を割ると一節ごとに鎧を着た人形と馬形のものがあった[72]。ここには風水を隠す趣向はないが，代わりに皇帝に届く矢になっている。遺言通りに墓参すれば，皇帝に矢が当たり，皇位につけたというわけなのであろう。

竹中の兵馬の趣向は，四川省の竜脈破壊譚にもあり，また先の南通の類話にもあったが，苗族においては竹王伝説として独立したかたちで伝わっている。苗族の右竹王，左竹王という英雄が，竹中より出した多くの兵馬を用いて皇帝の軍を敗るが，皇帝側の詭計に陥って呪宝の力を失ってしまう話である[73]。竹中から兵馬が出る趣向も，様々な風水破壊譚に結びつきながら広く伝えられていたのである。

一方，皇帝を射た矢が失敗に終わった話にも，それなりの広がりがある。丁乃通はこれをAT592として16の類話を指示し[74]，さらに劉守華氏もこれを「早発的神箭」として，２３例を加えているが[75]，それらは必ずしも風水破壊譚にはなっていないようである。むしろ言いつけを守らなかったために矢が皇帝をはずれ，皇帝になりそこなうという「竜になり損なった風水師」

と似た構想をもつ物語があり，モティーフの互換によって中間的な形態の物語が生み出されていたものであろう。最初に述べたダウール族の類話の前半部分は，矢にこそなっていないが「早発的神箭」の類話であり，それが風水破壊譚の前段をなしていたのである。矢にかかわる類話は，福建省の安溪県にもある。

洪塘郷にある夫婦があったが，妻が懐妊すること十六ヶ月で子を産まないため，殺されることになった。妻が夫に言うに，自分の死後，墓には碧竹を植え，百日後にそれを伐って弓矢を作り太陽めがけて射れば互いに見えることもあるでしょうと。夫が妻の言った通りにすると，矢は皇帝の玉座に刺さる。皇帝が卜地官に占わさせると，卜地官は真主は地下の墓中にいるが遁法を用いているので発見できないという。一人の乞食が墓の上で休む。地下から母子が話しているのが聞こえる。母は，父さんは九十九日を百日と間違えたので失敗したが，黒犬の血を付けた銅針を使われる以外，われわれは安全だと話している。翌日，乞食は多くの人夫が墓を掘っているのを知り，昨夜聞いた話をする。地方官は直ちに黒犬を殺して銅針をその血に浸し，それを乞食の休んだ墓の周囲にまく。そして墓を掘ると男児と女の頭が見え，男児は黄竜長袍を着ていたが方袖を通していただけであった[76]。この類話の特徴は，妻が墓中で王気を持つ子供を生んだところであるが，その下地にいわゆる墓中生育譚があることは間違いあるまい。また類型Ⅱ（B）でみたごとく，立ち聞きの趣向も生きている。そして最後の竜袍を方袖だけ着ていた男児というのは，王気が成就しかかったという意味にもとれるが，下着を着けた風水師からの変化であろう。あるいはこの物語にも，妻を葬る際に遺言に背く一条があったのかもしれない。このようにして「竜になり損なった風水師」は，「早発的神箭」などの類型と接触しながら様々な趣向を取り込みつつ独自の風水破壊譚として，中国大陸の南北にわたってまとまった伝承を維持していたのである[77]。

八．風水師と風水破壊譚の伝承

以上，中国大陸に伝わるいくつかの風水破壊譚を紹介した。もちろん，これらの他にも様々な物語が伝えられれていることは間違いないが，中国の民間説話の世界において，風水の破壊を主題とする物語がいくつかの特徴的なかたちをとりながら，広い範囲に展開していることは明らかであろう。

これらの風水破壊譚を考えるに当たって注意すべきことは，これらの物語を伝えた者の性格である。沢田瑞穂氏は「南蛮子盗宝譚」について[78]，デ・ホロートは「失明した風水師」について[79]，これらの物語が風水師によって語り広められたと説いている。風水の破壊を説く物語の全てが同じように風水師によって運ばれたと考えることはできないが，風水の破壊が風水師によってのみなし得ることである以上，物語の伝承と伝播についても風水師が何らかの形で関与していたことは認めねばなるまい。風水を破壊することのできる能力を語ることは，同時に風水の選定と調整の能力を語ることにもなる。風水破壊という虚構の物語を語ることは，風水師にとってそのまま彼らの風水選定と調整の異能を宣伝することなのであった。

類型Ⅰの江南にまとまって伝わる風水封殺譚にしても，様々に形を変化させながらも，そのほとんどが明の朱元璋と劉伯温の話にまとめられるのは注目すべきことである。これらの物語には，劉伯温の力を賞揚すべき力がはたらいており，それが江南を中心として，さまざまな「劉伯温ばなし」を生み出していたのである。劉伯温は風水の秘訣を説いた『堪輿漫興』の著者に仮託されており，風水師たちにとっては敬うべき先師であった。これらの伝説を生みだし，また語り広めていたのが，彼ら風水師であったことは間違いあるまい。

これらの風水破壊譚のうち，「失明した風水師」と「竜になり損なった風水師」は，共に最も文芸的に成長を遂げた物語であるが，僻遠のプイ族やダウール族といった少数民族のあいだに

最も整った物語が伝えられているのは面白いことである。しかも両話とも物語を清朝のことであるとし，ブイ族が咸豊，同治年間（1851－1874），ダウール族では乾隆年間（1736－1795）のこととして年代にまで説き及んでいる。しかも両話とも漢族の伝承と一致点が多く，ダウール族の類話に至っては遠く江蘇省の類話と細部にわたって一致している。おそらくこの二つの類型は，口承によってのみ伝えられたのではなく，背後に物語を伝える何らかの書冊があったものであろう。

旧時，華北に活躍した風水先生は，家伝の周易の書を持ち，古老から口伝によって受けた漢学の知識を持った「旧式の知識人」で，しかも大衆を説得できる話術に長けた人が多かったという[80]。またデ・ホロートによれば，風水師たちは「中国の賢哲たちの手で書かれた書物を深くまじめに研究することによってその技能を獲得した者はほとんどいない」状態で，読み書き以外の知識は「彼を門弟として採用した師匠の後に跟いて数年間全国を旅行行脚し，その間に師匠から竜・虎とか十二支やその他の羅経に関する神秘な奥義などについての空虚な口伝を授かりながら」得たものであった。そして「彼はせいぜい粗悪な印刷をした一二冊の手鑑を参考にするかもしれない。然し彼は，自己流の創意と能弁に頼った方が一段と容易なことが判ると，こうした手鑑を二度と覗き見ることは稀で」あったという[81]。

このように風水師が本格的な儒教的教養をもたず，師匠から授かった「空虚な口伝」と一二冊の手鑑と参考に，「自己流の創意と能弁」を展開していたとすると，彼らが風水にまつわる不可思議な伝説を伝え歩いていたと考えて間違いあるまい。そして風水伝説は彼らの「旅行行脚」と共に，中国大陸の広い範囲に伝わることになったものであろう。

〔注〕

(1) 何晓昕［著］宮崎順子［訳］，『風水探源』人文書院　1995　121～133頁。

(2) Eberhard, Wolfram：Typen Chinesischer Volksmarchen. (FF Communications.no.174) 1937 p.227＝王燕・周祖生［訳］『中国民間故事類型』商務印書館　1999　260～261頁。

(3)『史記』巻88　中華書局　1959　2570頁。

(4)『三国志』巻53　中華書局　1959　1246頁。

(5) 王国維［校］『水経注校』上海人民出版社　1984　1179頁。

(6) 来新夏［校点］『閩小紀閩雑記』福建人民出版社　1985　33頁。

(7) 顧希佳［整理］『杭州湾的伝説』中国民間文芸出版社　1984　36-37頁。

(8) 江蘇人民出版社［編］『南京民間伝説』江蘇人民出版社　1983　59～61頁。同じ話は浙江人民出版社［編］『朱元璋伝説故事』（浙江文芸出版社　1984　108-113頁）にもあるが，小異がある。

(9) 無錫市文芸芸術界聯合会［編］『無錫的伝説』上海文芸出版社　1983　90～92頁。

(10) 渡邊欣雄「大陸中国の風水塔と断脈説話」『中国民話の会通信』34号　1994　4～5頁。

(11) 木山英雄「中国の『堕民』など」，朝日百科『世界の歴史』第5巻　1991　朝日新聞社　B338～B339頁。

(12) 馬場英子「渓東村（浙江省寧波市）に伝わる話について」，野村純一，劉守華［編］『日中昔話伝承の現在』勉誠社　1996　230頁。

(13) 馬場，注12　229頁。

(14) 呉藻汀［編］『泉州民間伝説』1929　1969［複刻］111～114頁。

(15)『民間月刊』第2巻10，11合刊　1933　408頁。

(16) 姜佩君［編著］『澎湖民間伝説』聖環図書股份有限公司　1998　191頁。

(17) 姜，注16　192頁。

(18) 澤田瑞穂『燕趙夜話』采華書林　1965　54頁。山本斌『中国の民間伝承』太平出版社

1975　194～195頁。
(19) 澤田，注18　1965　86頁。
(20) 武田雅哉『桃源郷の機械学』作品社　1995　103～109頁。
(21) 黄栄燦［編］『福建民間伝奇』駱駝出版社　1978　13～16頁。
(22) 清水［編］『太陽和月亮』1933　72～77頁。
(23) 姜彬［主編］『呉越民間信仰民俗』上海文芸出版社　1992　656頁。『中国民間文学集成，上海市長寧区故事分巻』を引く。
(24) 山本，注18　1975　208～209頁。
(25) 澤田，注18　56～57頁。山本，注14，209頁。
(26) 山本，注18　167～168頁。
(27)『塩城市故事巻』中国民間文芸出版社　1989　332～334頁。
(28) 林蘭［編］『沙龍』1931　1971［復刻］16～17頁。
(29) 中国民間文芸研究会浙江分会［編］『浙江風物伝説』浙江人民出版社　1981　44～48頁。
(30) 瀘州民間文学集成編委［編］『瀘州民間文学集成』四川人民出版社　1992　205～207頁。
(31) 成都民間文学集成編委会［編］『成都民間文学集成』四川人民出版社　1991　476～477頁。
(32) 成都民間文学集成編委会，注31　588～589頁。
(33) 双柏県文化局［編］『双柏民間文学集成』雲南民族出版社　1992　37～38頁。
(34) 湯君純［主編］『曲靖地区故事巻』雲南民族出版社　1993　324～326頁。
(35) 李凱ほか［調査］「景谷県傣族社会経済調査」，雲南省編輯組［編］『思茅，玉溪，紅河傣族社会歴史調査』雲南人民出版者　1984　76頁。
(36) 林蘭，注28，13～14頁。
(37) 林蘭，注28，10～14頁。
(38) 林蘭［編］『民間伝説（上）』1930，『古蹟伝説』1971（復刻）17～18頁。
(39) 崔仁鶴『朝鮮伝説集』日本放送出版協会　1977　361頁。
(40) 直江広治『中国の民俗学』岩崎美術社　1967　188頁。
(41) 直江，注40　187頁。
(42) 山本，注18　192頁。
(43) 山本，注18　196～197頁。
(44) 山本，注18　210～211頁。
(45) 山本，注18　126～127頁。
(46) 山本，注18　125～126頁。
(47) 山本，注18　199～200頁。
(48) 山本，注18　201頁。
(49) 石田幹之助『増訂　長安の春』（東洋文庫九一）平凡社　1967　210～281頁。
(50) 山本，注18　202～205頁。
(51) 山本，注18　185頁。
(52) デ・ホロート［著］，牧尾良海［訳］『中国の風水思想』第一書房　1986　113～114頁。
(53) 姜，注23　657頁。『中国民間文学集成，上海市宝山区故事分巻』を引く。
(54) 姜，注16　123～124頁。
(55) 貴州省民間文芸家協会［主辦］『南風』1995年第3期　17頁。
(56) 高友謙『中国風水』中国華僑出版公司　1992　214頁。
(57) 袁学骏・李保祥『耿村民間文化大観』北京図書館出版社　1999　693～684頁。
(58) 増田福太郎『新・旧中国の信仰と表象』佐野書房　1974　227～228頁。
(59) 馬書田『中国民間諸神』団結出版者　1997　267～269頁。林明義［主編］『台湾冠婚葬祭家礼全書』第三篇「広沢尊王的伝説」を引く。
(60) 関敬吾『日本昔話大成』第6巻，角川書店　1978　8～81頁。
(61) Eberhard，注2　pp.147－153．小島瓔禮「甚五郎の忘れ傘」『比較民俗学会会報』第1巻第5号　1980　4頁。
(62) 山本達郎「王権の本源を物語る印度支那の数種の説話に就いて」，和田清［編］『加藤博士還暦記念・東洋史集説』富山房　1941　931～932頁。
(63) 高山信司『満州の故事と昔話』拓文堂　1943

322～325頁。
(64) 薩音塔那［採録，翻訳，整理］『達斡爾民間故事』内蒙古人民出版社　1987　46～49頁。
(65) 薩音塔那，注64　46～49頁。
(66) Eberhard，注2［訳］258－259頁。
(67) 梁景之「寒亭地区風水民俗調査」，山東大学［主編］『民俗研究』1996年第2期　86頁。
(68) 林蘭［編］『鬼哥哥』1930，1971［復刻］21～31頁。
(69) 林蘭［編］『董仙賣雷』1931，1971［復刻］92～95頁＝呉守禮［訳］『雷賣りの董仙人』創元社　1940　119～123頁。
(70) 姜彬，注23，658～659頁。「中国民間文学集成，上海市金山県故事分巻」を引く。
(71) 祁連休，胥莉［主編］『中国伝説故事大辞典』中国文聯出版公司　1992　435頁。
(72) 貴州省民間文芸家協会［主辦］『南風』1991年第3期。29～30頁。
(73) 貴州省民間文芸家協会，注72　1993年第2期，17～18頁。「竹王的故事」
(74) Nai-Tung Ting, A Type Index of Chinese Folktales.（FF Communications no.223）1978 pp.107－108＝鄭建成ほか［訳］『中国民間故事類型索引』中国民間文芸出版社　1986　205～206頁。
(75) 劉守華『比較故事学』上海文芸出版社　1995　268～282頁。
(76) 謝雲声［編］『福建故事』第3集　1930　33～37頁。
(77) この伝承は，韓国の嶺東地方にも伝わっている。杜昌久「嶺東地方故事的幾種形式」，陶立璠［主編］『亜細亜民俗研究　第二集』民俗出版社　1999　216頁。
(78) 澤田，注18　25頁。
(79) デ・ホロート，注52　112～113頁。
(80) 山本，注18　181頁。
(81) デ・ホロート，注52　110～111頁。

新刊紹介

松本浩一著
『中国の呪術』

20年余にわたる著者の台湾道教および民間信仰の研究のエッセンスを，一般読者対象に平易に論じたのが本書である。道士・法師・童乩・誦経団といった民間宗教者が依頼者と死者とのトラブル，すなわち鬼に対して行う呪術を取り上げ，禁圧・慰撫・贈答などその対処法とともに，護符・呪文・手印などを通して解説する。第一部民間宗教者と呪術儀礼　1台湾の祠廟　2呪術を行う人々　3法師の呪術儀礼　4誦経団の法会　5太保先生と紅頭師公　6鬼との戦いとしての呪術　第二部中国呪術の歴史　1鬼と初期の道教呪術　2道教の符呪　3雷法とその展開　4中国呪術の伝統，の構成をとる。巻末に参考文献を付す。

著者の属する道教研究会の近年の活動，成果には目を見張る。読みながら，故直江広治教授の紹介を受け，最初の海外調査らしきまねを台湾で著者，飯島吉晴氏と共にした事が思い出された。その後の長年にわたる，粘り強い現地調査には頭が下がるとともに，現地の人々との信頼関係が行間に伺える。台湾の民間信仰については，先に民俗学的視点から，古家信平『台湾漢人社会における民間信仰の研究』(1999　東京堂出版）の大著がある。著者の道教史を踏まえた本格的論著が待ち望まれる。

（佐野賢治）

A5判　246頁　2001年12月刊　大修館書店
定価1,800円